

さいたま市岩槻区の歴史的建造物に関する調査研究

建設工学専攻

建築史研究

1 はじめに

1.1 研究背景と目的

岩槻は 1457 年の岩槻城築城以来、武蔵の国の要所として栄え、城下町岩槻として地位を確立してきた。また将軍が日光社参の際に通る日光御成街道の宿場町としても重要な役割を担っていた。やがて廃藩置県が行われ、当初岩槻に置かれるはずだった県庁が諸事情から浦和に決定し、岩槻はその地位を失ってしまった。

2005 年 4 月 1 日、旧岩槻市はさいたま市と合併。「さいたま市岩槻区」として政令指定都市になり、新たに歩み始めた。それに伴い、さいたま市全区で文化財の再評価が始まっている。しかし、昭和中期まで岩槻の街道沿いに連なっていた町家建築群は、現在はほとんどが建替えられ数棟が点在しているのみである。連続した町並みを取り戻すことは難しいが、現存しているものを守っていくには具体的な動きが必要である。本研究は、地域住民の意識啓蒙の一步として、調査を行い岩槻の歴史的建造物の価値を見出すことを目的とする。

また岩槻は日光東照宮の造営・修築にあたった工匠たちにより、人形づくりが始まった。現在もその技は受け継がれ、「人形のまち」として全国的に知られている。このひな人形という産業とまちに残る歴史的建造物を材料に、岩槻を盛り上げていけないか、今後の可能性を探る。

1.2 研究の流れ

- ・岩槻の中心地に残る歴史的建造物(町家・近代建築)の実測調査を行い、建物の基本的な構造・意匠を知る。
- ・日光御成道(市宿通り・久保宿通り)の道路拡幅に伴う歴史的建造物への影響を考察する。
- ・調査建造物の家主及び地域の方に話を聞き、地域住民のまちづくりに対する意識度を探る。
- ・他の地域で行われているまちづくり、地域活性化について具体的事例(どのようなまちづくりを、誰が中心となって行っているか)を調べ、岩槻の今後の可能性を考察する。

2 岩槻の歴史的建造物について

2.1 岩槻城に関する遺構

岩槻城は元荒川と古隅田川の合流地点という立地的問題から、内乱が多く勃発した。また築城者など未だに多くの謎が残されている。岩槻城の本丸御殿は、1600 年代に数度の日光社参において将軍の宿館として利用された。しかしのちに大火災に遭い、その後は再建されることなく明治初期に廃城となった。

現存する城の遺構としてはわずかであるが「大構」、堀の中に造られた障害物である「堀障子」も残存している。これらは中世の騎馬戦力時代の貴重な遺構といえる。また岩槻城城門である「黒門」や、城内や城下の人々に時を知らせていた「時の鐘」なども現存している。



(a) 遷番館

1955 年県指定の文化財。埼玉県内で唯一現存し、保存されている藩校建築である。1799 年に岩槻藩の学者児玉南何が、青少年の教育のため私塾として開校、後に藩校に昇格した。しかし、建築年は不詳であり、藩士の住居を利用したという説もある。40 坪ほどの茅葺の建物で、内部は 15 畳と 9 畳の二間続きの教場が備えられていた。現在は修復され、公開されている。

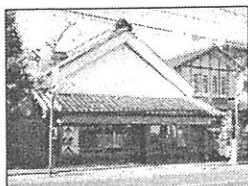


写真2 明戸天満宮

(b) 明戸天満宮

一間社流造りであり、江戸時代初期の建築である。屋根は現在銅板葺きであるが、もとはこけら葺きであったと思われる。天保時代の絵図では岩槻城の北東側に描かれている。今までに岩槻城二の丸や遷番館の敷地内など幾度も移転を繰り返してきたが、1984 年中村餘容氏によって絵図に描かれている現在の場所に戻された。

2.2 町家建築の現況



が高く、屋内で反物を干していた可能性がある。現在道路拡幅に伴い、曳家を行っているところである。今後の建物活用法は検討中。



は昭和の中頃、時代の流れに伴い看板で覆われてしまったが、平成 3 年再び昔の姿を取り戻すべく、改修が行われた。

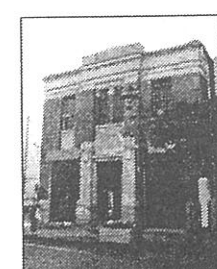


われた。そのため二本の柱が近接する独特な構造となっている。作業場は別棟に移り、現在は事務所・展示スペースとして使われている。登録文化財申請中。



56 年に改修が行われ、保存状態も良好である。見世の間には揚戸や階段棚、昔の道具が残されている。今後の建物活用法は検討中。登録文化財申請中。

2.3 近代建築の現況



使われている。登録文化財。

(a) 志水家

明治初期の建築。間口 4 間半×奥行 9 間、切妻屋根の妻入である。市宿通りに面しており、先代まで染物屋を営んでいた。見世の間には染料の瓶など当時の道具がそのまま残されている。平屋だが天井

(b) 田中家

江戸末期の建築。見世部分は間口 4 間×奥行 4 間。切妻屋根の平入である。嘉永年間創業で 150 年の歴史を持つ和菓子屋である。町家ならではの細長い敷地に見世、製造場、住居と続く。見世の外観

(c) 矢作家

昭和初期の建物。間口 4 間半×奥行 9 間半。入母屋屋根、妻入である。代々人形店を営んでいる。建てられた当初は平屋であったが、手狭になったため、昭和 25 年頃二階をかぶせるような形で改築が行

(d) 長谷川家

明治中期の建築。見世部分は間口 4 間×3 間半。切妻屋根、平入である。先々代までは木綿問屋を営んでいた。建物は見世蔵造の他に離れ、米蔵もあったが火災によって焼失したため現存しない。昭和

(a) 大正館

大正末期の建築。二階建ての煉瓦造であり、寄棟の重い瓦屋根を支えるために、二階天井裏は複雑な木造トラス構造となっている。久保宿通りに面しており、昭和 35 年まで銀行として使われていたため、建物後方には金庫室が残っている。その後東玉人形の分店となる。老朽化が進んだため、平成 18 年改修工事が行われ、現在は人形展示に使われている。登録文化財。

m506068 やまもと きら恵 山本 幸恵

指導教員：伊藤 洋子 教授



昭和 5 年竣工の建築。現在は岩槻郷土資料館として使用されているが、元は岩槻警察署の庁舎である。岩槻で初めての鉄筋コンクリート建築物。塔屋を持つ二階建てで、後方には木造の演武場が付設している。現在は駐車場となってしまうが、さらにその奥には官舎があった。市宿の長細い地割が残る。鉄筋コンクリートに石造の門柱という一見シンプルな外観であるが、内部は白い円柱や梁で構成され、大理石の階段やアーチ窓、扉に施された装飾など、大正から昭和初期の建築様式をとどめている。

3 都市計画道路と町並み

3.1 道路拡幅とその影響

都市計画道路はモータリゼーションの進展、経済の成長など社会全体が拡大する中で行われてきた。それは主に市街地内で発生、集中する自動車交通の緩慢や歩行者の安全確保が目的とされた。一方で都市計画に伴う道路拡幅が歴史的町並みや建造物を破壊するといった問題が示唆されている。・都市計画道路が都市の町並みや界限性を壊してきたという事実は現実としてあり、その爪痕は至る所に見ることができる。・だが相次ぐ震災などの災害救援においては、国道、地方道といった都市の基幹道路の重要性が見直されている。・また、道路拡幅によって豊かな景観を生み出している事例もないわけではない。

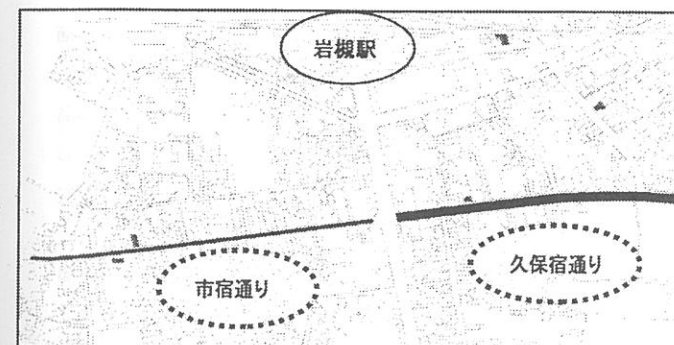


図1 岩槻市街地図

3.2 岩槻における道路拡幅

岩槻の中心地を通る市宿通りと久保宿通りは、日光御成道の一部である。当時のメインストリートであるこの通りは、昭和までは写真 3.4 のような商家が建ち並んでいた。

しかしこの市宿・久保宿通りにも都市計画がなされ、用地買収とともに徐々に建て替えが進み、町並みは変わっていった。現在、久保宿通りの拡幅は終わり、歩道が整備され、電柱は地中化された。市宿通りも建物のセットバックはほぼ終わり、あとは着工を待つばかりである。今後賑わいのあるまちを目指し、訪れた人が安心してまち歩きができる歩道の整備を期待する。

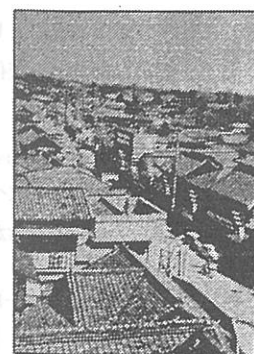


写真3 昭和中期の久保宿通り



写真4 昭和中期の市宿通り

4 具体的事例

次に挙げるのは、岩槻と共通点を持つ二都市のまちづくり実例である。いままでの経緯から、その特徴を知る。

4.1 新潟県村上市

村上市は新潟で一番古い城下町である。資源を活かし切れず衰退の道をたどっていた頃、町家が建ち並ぶ町人に道路拡幅を伴う近代化計画の話が持ち上がった。しかし、道路拡幅による衰退が全国各地で起こっていることを知った一人の住民が、町家を活かし、町に賑わいを取り戻そうと立ちあがり、村上市町屋商人会が結成された。その後「町家の人形さま巡り」や「町屋の屏風まつり」といったプロジェクトが行われた。これが話題を呼び、多くの人が村上市を訪れるようになった。それまで価値認識の低かった住民たちに、徐々に町家を誇りに思う気持ちが芽生えていった。しかし、はじめ住民の熱意とは裏腹に行政側は動こうとしなかったため、住民は自力で基金を募り、10 年計画で城下町として個性のあるまちづくりを目指した。また、伝承が危ぶまれていた地元の木工「村上市大工」も復活した。

4.2 福岡県八女市

八女市の中心市街地福島は福島城の城下町として栄えた。また手工芸・職人のまちであり、江戸時代に多種多様な産業の基盤が形づくられ、現在まで受け継がれている。八女福島は明治に入っても、中心街として栄えたが、徐々に近代化の波を受け、交通網の整備により福島の周辺が栄えていった。その結果、商業機能を失ったものの、開発などから免れ、現在でも伝統的町家建築が多く残っている。住民は大型台風によって被害を受け、町家が取り壊され、町並みが歯抜け状況になるのを見て危機感を感じた。そこで住民有志が勉強会を重ね「八女・本町筋を愛する会」を作り、「八女町家まつり」を行った。この結果住民や観光客の関心が向けられるようになり、さらに団体が発足、イベントや企画が定着していった。

村上和八女福島の両事例とも城下町である点や、町家を使ったひな人形めぐりでまちの活性化を行うなど、岩槻と共通する部分がある。しかし、岩槻では昭和の高度期に町家など歴史的建造物のほとんどが建替えられたため、現存するものは少ない。当時は古いものよりも、新しいものに目が向けられていた時代であり、岩槻の歴史ある町並みを残そうという動きはなかった。

5 おわりに

現在さいたま市では様々な開発が進んでいる。その中で岩槻は新しい地位を確立し、個性あるまちづくりを目指すべきである。岩槻はさいたま市の中でも高齢化率が一番高く、丹過町は岩槻駅からすぐという好立地でもかかわらず、小中学生が一人もいないという現状である。また、今回調査させていただいた町家の当主からの聞き取りによると、年配者は岩槻に愛着もあり、町家など歴史的建造物の保存・活用に積極的だが、若い世代は全く関心が無いという。残しても後が困るといった具合である。これから先の岩槻を担っていく若い世代に、このままだと歴史的建造物や町並みが消え去り、何の魅力もないまちになってしまうということを伝えたい。岩槻が歴史あるまちとして賑わいを取り戻すためには、まず地域住民、特に若い世代の意識が変わらなくてはならないと言える。

現在計画されているさいたま高速鉄道の岩槻延伸が決まれば、交通の便が良くなり、今後より一層ベッドタウンとして人口が増加する可能性がある。多くの人が住みたい、訪れたいと思えるような賑わいのあるまちになることを願う。

ここ数年にわたる岩槻の調査のなかで、城下町ならではの歴史的建造物や岩槻をもっと盛り上げたいと願う地域の方々や触れ合うことが出来た。ここに調査に協力して下さった皆様に心より感謝いたします。

《参考文献》

- ・『岩槻市史』通史編、1985
- ・『岩槻市史』近世資料編Ⅳ 地方資料(上)、1982
- ・いわつき郷土文庫第三集『岩槻城と城下町』、埼玉県岩槻市教育委員会、2005
- ・西山卯三、『歴史的町並み事典』、柏書房株式会社、1981
- ・大河直躬、『歴史的遺産の保存・活用とまちづくり』、学芸出版社、1997
- ・大河直躬、『都市の歴史とまちづくり』、学芸出版社、1995